

秀 賞

約束

宮城県仙台市立鶴谷中学校

三年 佐藤 有 希

私の生活は明日も、今日と同じように続いているだろう。当然、私に関わる人達も、今日と同じように私の周りで生きている。それが当たり前だと信じていた。疑ったことさえなかった。それが一気に覆されることになった日、私は激しく後悔した。

私が中学生になった年の夏、父が死んだ。癌だった。病気が見つかった時はすでに末期だったらしい。私は中学生になったばかりだった。小学校ではいじめを経験したこともあり、新しく始まる生活に不安が大きく、一方では期待もあった。吹奏楽部に入学することを決め、時間にも気持ちにも、余裕は全くなかった。父の変化にも気づかなかった。そんなある日。父は母と一緒に出かけようとしていた。どこか旅行にでも行くような大きな荷物も持っていた。私はそれを気にすることもなくピアノの練習をしていたが、準備を終えたらしい父が私に言った。「しばらく入院するかもしれない。家に帰って来られないんだ。ごめんね。」

とても驚いた。父が病気だった。入院しなければいけないほどの病気だった。もしかしたら、もうこうして父と話すことができなくなるかもしれないという、漠然とした不安も感じた。しかし、私は父にそ

の不安を感じ取られたくはなかった。だから何でもないことのように言ったのだ。

「そんなのいつもじゃん。全然平気だよ。」

父は一瞬、悲しそうな顔を見せたが、

「そっか。じゃあ、よろしく。」

と言つて家を出て行った。あの時私は、不安を感じさせたくなかったのではなく、父がいなくなる寂しさを受け入れられず、目をそらしてしまつたのだと思う。私が何となく感じた不安の通り、それから二度と、元気な父が家に帰ってくることはなかった。そうして思い出したのだ。小学校で友達との関係がうまくいかず、誰も信じられないと落ち込んだ日々に父が話したことを。「それでも、人を、人との関係を大切に生きてきなさい。きっといつかそれは伝わるから」というようなことだつたと思う。その時は納得できていたわけではなかったから、そんなものかと思っただけだつたが。

母は毎日病院に通う。私は毎週日曜日にお見舞いに行くのが生活の一部になった。ある曇りの日曜日、いつものように父のお見舞いに行くと、祖父母もやってきた。祖母はベッドの父に向かって、

「きっと治るから、頑張つてね。」

と言つた。父の表情が、ほんの少し明るくなったように感じられたが、そばにいる母の顔は複雑そうだった。何となく視線をそらした先の、窓から見える空には、雲の間から太陽が顔をのぞかせていた。祖母の言葉を信じたい私には、一筋の光が差したようだった。七月になると、父は自宅近くの病院に転院した。ホスピス病棟だった。まさかと思つた。父が病気を治すことを諦めるとは思つてもみなかったから。深い穴の中に落ちていくような感覚が私を襲つた。たしかに、治療はつらそうだった。薬の副作用とかで、どんどん弱気になる父がいた。でもや

はり信じたくはなかった。ちょうどその頃は、部活がとても忙しくなつていた。コンクールが目の前だった。日曜日のお見舞いもなかなか行くことができないまま八月になった。朝、目が覚めて、外を見る。窓から見える道路がぬれていた。夜のうちに雨でも降つたのだらうと思つた。いつもの朝のはずだった。朝食を食べ、部活に行こうとすると母が言った。

「今日はみんなまで病院に泊まるからね。」

埼玉に住む親戚も来るらしい。再び雨が降り始めた空を見上げると、なんだかよく分からない感情が私の心を覆つた。

久しぶりに家族全員がそろつた病室で、父は嬉しそうだった。母は慣れた動作で、使つたコップを洗つたり、持参した父の着替えを入れ替えたりしている。それが記憶にある父との最後の光景だつた。気づけば母と弟は泣いていた。父の手は冷たい。

「頑張つて育てていくから。」

という母の震えた声に胸が詰まつた。慌ただしいたくさんの仏事のあと、遺骨が家に帰つてきたとき、どつと後悔が押し寄せてきた。父に告げてしまつた言葉、「全然平気だよ」なんて嘘だつた。それなのにもう謝ることもできない。

私はこの時初めて知つたのだ。明日も生きていること、周りの人が明日も元気でいることが、当たり前ではないということ。私はもう二度と後悔したくないと思つた。死んでからでは遅いのだ。だから人を、人との関係を大切に生きていくべきだ。あの日はよく分からなかつた父の言葉が、今、私の中では父との約束になつていく。

作文を書くに当たって

中学生である私が、人に伝えられる何があるか、自分が何かに挑戦するとしたら何なのか、と考えたとき、父親を亡くした自分と向き合うことを決めました。

今は亡き父に教わつたことや、人との関わりの大切さを残しておきたいと思い、書いた作文です。